

## 宇宙輸送システム部会のこれまでの主な取り組み

平成 26 年 1 月 31 日

宇宙政策委員会

宇宙輸送システム部会

### 1. 前回の宇宙政策委員会での報告以降の取り組み

#### ● 宇宙輸送システム長期ビジョンについて

宇宙輸送システム部会第 11 回会合（平成 25 年 12 月 20 日）において宇宙輸送システム長期ビジョン素案の検討状況について審議を行った。検討状況の概要は以下の通り。

- 宇宙基本計画に基づき、2040 年から 2050 年頃の宇宙輸送システムに関し、我が国が取り組む方向性について総合的に検討し、宇宙輸送システム長期ビジョン素案として取りまとめるべく宇宙輸送システム長期ビジョンワーキンググループ会合にて審議中。
- ワーキンググループ会合における長期ビジョン素案の検討では、宇宙利用の飛躍的拡大のためには、再使用型宇宙輸送による低軌道領域の宇宙輸送コストの二桁低減を目指すべきとした。
- また、低軌道領域の再使用型宇宙輸送機の開発はロケット型、エアブリージング型、ロケットとエアブリージングの組合せ型という 3 つのシナリオを想定したマルチパスのアプローチをとり、2010 年代に小型実験機の開発に向けた検討を開始すべきとした。
- 低軌道領域の再使用型宇宙輸送システムの技術課題や高軌道領域の宇宙利用及び将来宇宙輸送システムについては引き続き検討を行う予定。

部会の委員からの主な意見は下記の通り。

- 将来の宇宙利用の姿についての検討をさらに深めるべき。
- 宇宙利用からの視点も重要だが、我が国として再使用型宇宙輸送システムやその推進系を研究開発するということが最も重要なことではないか。
- 我が国が宇宙輸送システムの技術を保有するのは、そもそも自在性、自律性を確保するためである。将来の宇宙輸送システムも同様。
- 先端的な研究開発で生まれる技術の波及効果や意義についても議論を深めるべき。
- 将来の宇宙輸送システムを検討する上で、我が国として有人をどうするのかという議論を深めるべき。
- 国として有人をどうするのかという議論はあるが、一方で民間としては宇宙輸送機には人が乗って当たり前という認識を持っている。
- 来年度から新たな基幹ロケットの開発に着手されるが、そのような現在の活動と将来宇宙輸送システムがどのようにつながっていくのかを示すべき。

- 近い将来に実験機や実証機の開発へ挑戦していくことは賛成。
- 我が国の技術的な強みであるシステムの高信頼性を追求すべき。宇宙輸送システムについては信頼性が高ければ価格が多少高くても強みになるはずである。
- 将来的に国際共同開発なったことを想定し国際優位性の確保は重要な視点。

## 2. 今後の宇宙輸送システム部会の予定

### (1) 宇宙輸送システム長期ビジョンについて

- 部会の委員の意見を踏まえ、ワーキンググループ会合において引き続き長期ビジョン素案を審議中。
- 今後、部会の審議を経て、内閣府宇宙戦略室の調査の一環として意見募集を行う予定。
- 頂いた意見も踏まえワーキンググループ会合にて長期ビジョン(案)を作成し、部会において取りまとめを行う予定。

### (2) 新たな基幹ロケットについて

- 宇宙政策委員会第17回会合(平成25年10月25日)において決定された「新たな基幹ロケット開発着手に当たり整理すべき事項に関するとりまとめ」において、政府による評価は宇宙政策委員会において行うこととされたため、新たな基幹ロケットの開発に係る進捗管理のあり方について、部会において審議を行う予定。

#### (参考)

「新たな基幹ロケット開発着手に当たり整理すべき事項に関するとりまとめ」(抄)

#### 5. 適切な開発の管理

##### (2) 政府による進捗管理と評価

##### ① 中間、事後を含む適切な評価の実施

国民への説明責任を果たす観点から、新たな基幹ロケットの開発に当たっては、政府による評価を行う。

政府は、JAXA が取りまとめる開発プロジェクトが「我が国宇宙活動の自律性の確保に資するものとなっているか」、「国際競争力ある宇宙輸送システムとなっているか」等の観点から評価を行い、所要の措置を講じる。

政府による評価は宇宙政策委員会において行う。具体的な評価項目、時期、手法等については、今後検討・調整していくこととする。

以上